

## 学部教育におけるSNS導入と展開

宮浦 崇\*<sup>1</sup> 西出 崇\*<sup>2</sup>

〈概要〉立命館大学政策科学部では、学部教育を支援するオンラインツールとして、「政策科学部SNS」と呼ばれる、学部公式のSNS（ソーシャル・ネットワーク・サービス）を2007年度より実験的に導入し、現在、本格的に活用を進めている。このようなオンラインツールは、一般に情報共有の利便性の向上や、双方向のコミュニケーションの促進といった点で注目される。しかし、SNS導入のメリットはこれだけにとどまらない。①情報リテラシー涵養の場、②コミュニケーションと情報共有の広がり、③情報の蓄積の3つの利点が明らかになってきた。ここでは、これまでの運用をふまえて、これらの利点について考えてみる。

〈キーワード〉学士過程教育, リテラシー, オンラインコミュニティ, SNS, OpenPNE

### 1. はじめに ー導入の意図と経緯

立命館大学では1990年代前半より、全学規模で情報基盤整備を進めてきた。そのような中で設置された政策科学部では、当初から、学生全員のコンピュータ携行を掲げるなど情報機器の利用を当時としては先進的に進めてきた。また、インターネットが普及し始めた時期でもあり、電子メールやNewNewsなどを利用したオンラインツール利用を積極的に進めていた。

他方で、1990年代の中盤から2000年代前半にかけては、一般にもインターネットの利用が急速に普及し、Webベースで様々なサービスが提供され始めた時期と重なっている。そのため、当初は、大学が提供するサービスが活発に利用されていたが、学外のWebサービスの充実に伴い、それぞれのニーズに応じた、より利便性の高いサービスへと利用者が徐々に移行していく。このような流れの中で、2003年度に大学が提供してきたグループウェアのサービスが終了し、代替として、2002年度からより授業支援機能の充実したLMSとして「WebCT」が導入される。

しかし、政策科学部ではWebCTの利用はそれほど進まず、ゼミナールなどでの情報共有には、外部のWebサービスの利用が広がっていた。このような状況において、学部の構成員で手軽に利用できるサービスとして、オンラインツールの導入を模索していた。このとき、社会的に注目され始めたSNSというコンセプト、すなわちメンバーを一定範囲に制限しクローズドなコミュニティを形成すること、および現実の社会関係をオンラインコミュニティの基礎にすることに着目し、学部教育の支援ツールとして実

験的に導入したのが、この「政策科学部SNS」である。

### 2. システム構成と運営

本SNSの導入は実験的なものであったため、システム構築に際してはほとんどコストをかけることができなかった。そのためシステムは、学部内の余剰なコンピュータおよびオープンソースソフトウェアを用いて、学部独自運用の情報基盤内に構築した。

学部が運営するSNSでは、メンバーが学部の構成員以外に無限定に広がっていくことは好ましくないため、新規ユーザを招待する権限を管理者のみに制限している。SNSをどのように定義するのは難しいが、現実の人間関係に基づいてオンラインコミュニティを形成するところに、そのコンセプトの一つの特徴を捉えることができるだろう。

メンバー登録をするにあたり、1年次生全員が履修する情報系科目の授業内で、学部SNS設置の意図や目的、位置づけ、基本的な利用方法を説明した上で、一斉に登録を行っている。また、他学部生や学外者など、政策科学部の構成員以外の招待については、教員からの依頼があった場合のみ認めている。

政策科学部SNSはユーザ個人のホーム領域と、「コミュニティ」と呼ばれる、複数のユーザが共有する電子掲示板がある。以前に利用していたグループウェアと異なるのは、ユーザの個人領域の存在、およびユーザが自由に「コミュニティ」を設置できることである。

ここで重要なのは、ユーザが自由に設置することができるという点である。ユーザーは、学

\*1 MIYaura, Takashi : 立命館大学教育開発推進機構 e-mail= miyaura@fc.ritsumeit.ac.jp

\*2 NISHIDE, Takashi : 立命館大学政策科学部 e-mail= nishide@ps.ritsumeit.ac.jp

部（システム管理者）が用意したカテゴリに沿って、自主的にコミュニティを設置し、それぞれの用途に応じて利用することができる。

コミュニティと並んで、SNSで重要なのがユーザの個人領域が存在するという点である。政策科学部SNSでは、個人領域に付随する機能として多くのSNSと同じく、「日記」や書籍のレビュー、スケジュール管理、アルバムなどが利用できる。その中でも、多くのユーザが利用しているのが日記である。ユーザは、この「日記」を、個人的な記録から、公開性をうまく利用して情報発信や主張を行うなど、様々に利用している。また、日記には誰もがコメントをつけることができることから、日記の内容について、双方向の議論が発生することもある。

### 3. 管理上の課題

この様に政策科学部SNSでは、個人の「日記」とグループで利用する「コミュニティ」をユーザが自由に利用しているが、学部が運営するSNSで問題となるのが、その管理である。SNSは、「コミュニティ」がユーザ自身の手で設置できるなど、ユーザの自由度が高いシステムである。そのため、管理者が一元的に書き込み内容などを管理することは難しい。特に、利用が活発になってくると、全ての書き込みを管理者がチェックし、不適切なものがあれば削除したり、書き込みを行った学生を注意、指導することが、物理的に難しくなる。政策科学部SNSでは、メンバーが学部の構成員で閉じていることから、このような管理者による網羅的な内容のチェックは行っていない。基本的にはそれぞれの「コミュニティ」の管理者やユーザの自主性に任せて運営している。

しかし、時には不適切な書き込みが行われることもある。これまでも、差別的な発言や他人の誹謗中傷、不適切な行為の告白など、何件かの不適切な書き込みがみられた。そのような場合には、状況に応じてオンラインで書き込みにコメントをつける形で注意をしたり、即時的に対応が求められるものについては、書き込みの強制削除やログインの停止、学生呼び出しなど、現実世界での注意や指導を組み合わせで対応している。これらのうち、書き込みの削除やログイン停止は、管理者および学部が対応する必要があるが、他方で、オンライン上での注意や指導は、管理者以外にも利用している教員や学生相互でも行われており、うまくガバナンスが働いている場面も見られる。

### 4. 学部教育におけるオンラインツールの意義—SNSの教育的効果について

政策科学部SNSの運用の中から見えてきた、学部SNSが教育に果たす役割と効果は、従来から言われている学生・教職員の情報共有、インタラクティブな授業実践のためのコミュニケーションツールとしての役割のほかに加えて、ひとまず、①情報リテラシー涵養の場、②コミュニケーションと情報共有の「広がり」、③情報の「蓄積」の3点に整理できる。

オンライン上にリアリティのある「仮想学部空間」が形成されていることそのものは、学部教育において、情報リテラシーの涵養の場として大きな意味がある。このオンライン空間は、学部というクローズドな空間であるが、一定のパブリックな空間である。これは、例えるならば公道に出る前の「自動車教習所」であるといえる。すなわち、インターネット空間に踏み出す前に、一定の失敗が許容される場で、学生は失敗を恐れずに他者に対して公に発言し、失敗をしても注意や指導などが行われながら、情報リテラシーを身につけていくことができる。

コミュニケーションと情報共有の広がりという文脈では、それぞれが外部のWebサービスを利用している状態では見えない、他のグループの活動が可視化されることに大きな意義をみることができる。それぞれが別々のサービスを利用するならば、それぞれのグループの利便性やコミュニケーションの活性化は進むだろう。しかし、グループのメンバー以外からは、それらを見ることができない。学部にも誰もが利用できる利便性の高いサービスが用意され、皆がその基盤を利用することで、グループや学年を超えて互いに何をしているのかが可視化される。これによって、相互に刺激を与えあったり、研究のヒントを得たり、さらには新たな「つながり」が生まれるといった、様々な波及効果が期待できる。

オンライン空間でのコミュニケーションは、文字を基礎にしている。学部SNSを利用して行われるコミュニケーションの過程は、そのままログとしてシステムに蓄積されていく。つまり、コミュニケーションを促進するツールであると共に、それらのプロセスを記録するツールとしても捉えられる。これは、昨今注目を集めている、電子ポートフォリオのコンセプトにも通じるものであり、学生個人の「蓄積」として同時に、学部教学にとっても、教育の過程の記録として重要な資源となる可能性がある。